

滑稽は俳句の最大公約数である

前川敏夫

小説家や詩人というのは、それぞれのプロをさす言葉だが、俳人というものの定義はプロ、アマに係わらず俳句を作り続ける人のことである。(本来、俳句にプロ、アマの区別があるのがおかしいが。)筆を断った小説家はいても、俳句を作らなくなれば俳人ではない。

俳句を常に作り続けるのだから、いつも傑作ばかりというわけにはゆかない。それはアマもプロも同じである。子規はある年には二千句も創り、そのほとんどは駄句だと自認しているくらいである。子規の俳句革新以後、虚子の句に、

大空に又わき出でし小鳥かな

がある。この句は全く事実をそのまま言っている句であるが、この句に感動しない人は少ない。

この句にしても「虚子全集」を読むと解るが、何万という駄句の中から生まれた名句である。名のある俳人の句で名句と言われている句も、何千何万の駄句の中から生まれてきたと言ってよい。俳句の名人というのは、量産の名人と言える。俳句は作り続けることに価値があり、凡句を恐れる事はないのである。

しかし、俳人の一部の人たちは「凡句」、「類句」と言われるのを極端に嫌う。

夏の闇鶴を抱へてゆくごとく 長谷川權 梅咲いて庭中に青鮫が来ている 金子兜太

上のような句は、「凡句」、「類句」と言われることはまずないであろう。しかし、私にはどこがいいのか解らない。多くの著名な俳人たちが名句として挙げているのだから、解らない私の感性が未熟なのであろう。しかし、これだけは言える。「夏の闇」と「鶴」、「梅」と「青鮫」との間には、何の脈絡も論理的つながりもない。

もしこんな言葉の配列が許されるのなら、広辞苑のどの言葉を持ってきても句ができて、無数の句が出来上がることになる。

ある人は「鶴」の代わりに「白鳥」や「鶇」を持って来るかもしれない。「青鮫」の代わりに「鰐」や「海豹」を持って来るかもしれない。そんな無数の組み合わせの優劣を論じていたら限がないし、我々凡人にはとてもついてゆけない。何百万という俳句人口のほとんどの人が解らないのではないか。指導者といわれる人達が、昔のフランスの象徴派の詩人のようなことを、国民文学である俳句に持ち込むのは俳句の本質から外れていると思うのだ。たった十七文字で人の心を打つのは容易ではない。しかし、だからと言って人を煙に巻くような句に逃げることだけはしたくない。

このような混乱が何故俳句に起こったかと言えば、俳句の本質である好い意味の「滑稽」の精神が失われたからだと思うのである。前掲の虚子の句に、「滑稽」の萌芽を読み取るのは私だけだろうか。座の文学といわれる俳句に共通するもの、我々凡人でも理解できるもの、国民文学として大多数を納得させるもの、その共通項こそ「滑稽」だと思うのである。